

日本医史学雑誌 第五十二卷 第四号 目次

原 著

中神琴溪『生生堂論語説』について

——文献学・書誌学的、更に医学思想の観点から——

館野正美……………五二

馬場貞由訳「遁花秘訣」写本一六種の書誌学的検討

松木明知……………五二

ガスバール・ポアンにおける筋の名称について

澤井直・坂井建雄……………六二

Revising Moral Treatment: Psychiatric Therapeutics in England 1750-1850

Akihito SUZUKI……………七四

ひろば

移民の医学史への展望——中野卓・中野進共編『昭和初期一移民の手紙による生活史——

鈴木晃仁……………三二

ブラジルのヨッチャン』（京都・思文閣出版、二〇〇六）に思うこと

鈴木晃仁……………三二

追悼

江川義雄先生を偲んで

原田康夫……………三七

資料

池田文書の研究（三十）

池田文書研究会……………三九

記事

例会記録

書籍紹介

深瀬泰日著『わが国はじめての牛痘種痘・植林宗建』（肥前佐賀文庫〇〇二）……………中西淳朗……………四七

日本医史学会会報	六二	篠田達明著『歴代天皇のカルテ』	六五
日本医史学雑誌第五十二巻	六三	鈴木晃仁・石塚久郎編『身体医文化論Ⅳ 食餌の技法』	六五
総目次	六三	神谷昭典著『日本近代医学の展望 医科大学民主化の課題』	六五
		岡田靖雄	六五
		瀧澤利行	六五
		杉浦守邦	六五

《本号の表紙絵》

江戸医学館の課業表

『躋寿館講次』

(北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部所蔵)

江戸医学館は、明和二年（1765）に幕府医官多紀家の五代元孝（1695～1766）によって創設された医学教育機関である。六代元恵（1732～1801）は、御匙・法印の極位に昇って医学館の基礎を固め、七代元簡（1755～1810）によって清朝漢学の影響を享けた考証医学が緒についた。創設時、学課学規制定に儒者井上金峨（1732～84）が参画したが、山縣大弼事件に連座して退いた（1767）。

この間、松平定信の幕政改革のもと、寛政三～四年（1791～92）にかけて、田沼時代以来の助成町屋敷の地代・諸医師からの寄付・多紀氏の私費による運営を改めて、一切の費用を幕府が支弁し、経理を多紀氏から分離し、教員・生徒ともに幕府医官とその子弟に限定して、名実ともに幕府直轄の医学教育機関となった。

ここに掲げた資料は、創設から十年目の安永三年（1774）に、医学館で開講する講義の内容・日程・時間割・講師を木版の一枚刷りにした時間割表である（H23.8×W34.3）。さきに拙稿（本誌45-3・1999、『杏雨』7所収の拙稿も参照のこと）において活字化したのが、原資料の紹介は今回が初めてとなる。多紀家歴代の自筆稿本とともに市場に出たもので、多紀家旧蔵と考えられる。

講義内容（テキスト）は、内経・方書・本草のほか金元の医論があり、儒書を併講し、経穴の実習がある。漢方・鍼灸教育のカリキュラムとして妥当な内容と評せよう。講師には、医官が一人もなく、元恵・金峨の門人知友が多いと見られる。多紀元堅『時選読我書』の天明期「百日教育」の記述が参考になる。

(町 泉寿郎)